

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額300円 6カ月前納制

〈もくじ〉

労働運動と政治闘争……………2

— 第三五回総選挙と社会党の教訓(五) —

総評労働運動と共産党の十中総……………4

■資料① ■統一労組懇世話人組合のよびかけ……………5

朝鮮その後……………7

— 朴大統領射殺事件と大衆 —

配転攻撃を考える……………10

— 日東タイヤの仲間の一総括 —

統一はたたかいとるもの……………14

— 沖電気一周年集會に千六百名 —

■資料② ■集會決議……………14

◇資料と解説◇

全電通福島県支部問題について……………16

■資料③ ■分会役員への「誓約書」……………16

■トリアル・アンド・エラー (4)……………16

富さんと有珠山……………18

■緊急号外・好評発売中■

『道』批判者たちへの反批判——『道』と科学的社会主義の擁護

定価 五〇〇円 (郵送費含)

# 旬刊社会通信

NO.76

一九七九年二月二日

一九七九年二月二日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

# 労働運動と政治闘争

——第三五回総選挙と社会党の教訓(五)——

労働運動は社会党がもつとも重視せねばならぬ大衆運動である。社会主義革命を戦略とする政党が、革命の主体たる労働者階級、そのたたかいである労働運動——を重視しないとするれば、自家撞着もはなはだしい。

ところで、労働運動重視について、いろいろの批判的意見がある。その一つは、政治闘争をもっと重視せよ、という主張である。

政治闘争(平和と民主主義の闘い)をたたかうことは、社会主義政党にとって当然の任務である。社会党は今の力量の範囲内で、政治闘争を精一杯たたかぬかなければならぬ。しかし問題はその中味ではあるまいか。

先日、日本社会党中央本部青少年局は、『日朝青年連帯運動強化にむけた討議資料』なる文書を発行した。その中に、朝鮮半島をめぐる政治情勢がいろいろ書かれている。日本の労働者が「朝鮮の自主的・平和的統一」のたたかいを支持する理由が書かれている。

しかし、日本の労働者は誰とたたかうのか。「日本の民主的・青年運動が日本の平和と民主主義を擁護するためにまず自ら闘い」とあるが誰とたたかうのか? そもそもなぜ朝鮮の問題をとりあげてたたかうのか? 政治的危機はわかるが、それと日本のわれわれとはどういう関係におかれているのか。こうした重要な点について資料は一般的に書くか、羅列するかのどちらかで終わっている。しかし、われわれ自身がなぜたたかうか、誰とたたかうかも不明瞭なまま朝鮮問題に取り組んでも、結局は観客席から拍手を送るだけの闘いに終わるであろう。

『討議資料』は根本的な問題を回避している。なぜ日米両帝国主義は、軍事力をあげて朝鮮の分裂を維持しようとするのか。日本独占の南朝鮮への帝国主義的進出は、日本の国内の労働者を含めた労働者に何をもちたしているのか。これらのことが明確にされなければ、日本の労働者はたたかいたい主体にはなり得ない。『討議資料』では、日本帝国主義とのたたかいたいが朝鮮労働者階級との連帯の土台であり、そのゆえの「自主的・平和的統一支持」のたたかいたいであることが明記されるべきであった。

## 二

ところで、敵の攻撃は、まさに敵を不明確にすることに集中されている。「仕事」や「儲け」がなければ企業は成り立たない、と倒産をちらつかせて、低労働条件を強要する。その背後では、海外へのプラント輸出が着々と進行する。労働者を脅す材料はますます増える。「海外の工場の方が生産性が高いから、ここは閉鎖する」と、労働者を路頭に放り出す……。はたまた国際競争力をつけるので販路を確保せねばならぬ。そこが「赤化」したら一大事。工場でも建てればいっそうの一大事——「日本丸」を沈没させるな! という号令がかかる。

この攻撃に、真向から「合理化反対、低賃金反対、権利を守れ!」とたたかいを挑める者だけが、独占の海外侵略に反対し、国際的な労働者の団結をも生み出す力をもっている。帝国主義戦争反対、侵略戦争・海外派兵反対、と自信をもって言える。

歴史をふりかえってみるといい。一九五九年の西尾派の脱落の基本は、「安保改定に反対するだけでなく、解消への道筋として具体案、対策を用意すべき」（事実上は賛成となる）「生産性向上を含む経済拡大計画を提案する」という彼らの主張である。ここでも生産性向上（合理化推進）と「戦争政策」は不離一体のものであった。

長期不況のなかで事態はいつそう進んでいる。右翼労働組合の幹部達は、「仕事よこせの一環として、武器の輸出解禁を要求している。エスカレートすれば、「戦争賛成」まであと一歩である。不況下で「仕事がない」「儲けがない」という敵の攻撃に対して反論できなければ、ここまでエスカレートするのである。

彼らが「武器輸出解禁」を主張してたたかえば、それは政治闘争であろう。しかし、その内容は労働者の真の利益とは少しも結びつかない。

労働運動にたいする指導理念が、問題の焦点であることは明らかである。合理化反対闘争をたたかいぬく基本姿勢がなければ、社会主義政党としての政治闘争はたたかきれない。合理化でふらつけば、すべてがゆらぎだす。労働者は、日々の職場の労働を通じて社会を見はじめた。したがって敵がそこから労働者の思想をかえていこうとするのは当然である。職場の合理化にたいする態度がゆらいだ時は、彼の世界観までが変化する戸口が開いた時である。それが右向か左向かは、ここでは問わない。

政治闘争を強調するのは結構。しかし、政治闘争の土台である経済闘争（とりわけ反合闘争）にたいする指導がアイマイな社会党である限り、階級闘争としての政治闘争を組織できないであろう。

### 三

ところで今回の選挙で、「社会党にはもう投票せぬ」という人々のなかに、人べらしの嵐のなかで泣く泣く退職していった人たちが多くあった。労組が十分なたたかいは組織せずにいるなかで、労組、そして労組の支持する社会党にたいする不信を抱いて退職していった人たちである。

ファッシュョの芽は政治反動としてだけあらわれるのではない。ファッシュョは大衆運動の土台を持たなければ、権力の座にはつけない。その大衆運動の組織化の条件が、こうした労組や党にたいする不信の蓄積のなかから育っていく。ファッシュョは労働者、勤労国民大衆が、信頼できる組織を、既存の諸組織の中に見出せなくなった時、急速に成長する。本当に困った時に何もしてくれなかった——そういう不信を取り除くことはたいへんな努力である。と同時にそういう事態の前に、首切り反対闘争を力いっぱいたたかわなければならぬ。事実そうしてたたかったところでは、退職者も選挙に協力的だったという。

もちろん、首切り反対闘争に限らず、いま反合理化闘争や賃金闘争に職場で取り組むには、多大な努力が必要である。そして報われるところは少ない。だが、たたかっている部隊の存在を示し続けることは、絶対に必要なことである。その部隊が見えていけば、次の高揚期には、はるかに大きな規模でのたたかいが組織しうるし、その部隊が見えなくなってしまうば、労働者は不信と絶望からファッシュョの道をたどることになる。

△つづく・鈴木 和夫△

## 総評労働運動と共産党の十中総

宮本共産党委員長が、同党の第一〇回中央委員会総会で、一月一六日の槇枝総評議長  
の発言をとらえ、「これは、日本の労働運動の弱点の集中的なあらわれであり、「一方  
においてナショナルセンターのあり方の問題をきびしくわれわれに問いかけている」(『赤  
旗』、一一・二二)と述べたこと、さらに同委員長が「ナショナルセンターのあり方」を  
「総評は戦線統一の母体に非ず」とした、一九六二年第八回大会四中総決議の当然の「結  
核」であるかのように述べたことが、総評労働運動のみならず、労働界全般に大きな波紋  
を呼びおこしている。

一月一九日付の『朝日』(夕刊)は宮本氏のこの発言を「総評指導部が『右より』の  
動きを続けるならば総評内での共産党系の非主流活動を強め、場合によっては『新しいナ  
ショナルセンター』も辞さず、との強い態度」を示したものの、「総評主流に強い警告を発  
する意味合い」が強いと観測している。

これまで本誌でも再三再四指摘してきたように、総評指導部の右傾化(たとえば①「社  
公」中軸と商業紙が報じる一連の動き、②労働戦線統一問題、とりわけ④ICFTU⑤労  
働組合主義での同盟へのスリ寄り、③八〇年春闘での八%統一賃金要求、④大衆運動不在  
の幹部請負主義)は、資本主義的合理化と真正面からたたかおうとする総評傘下の労働者、  
総評運動の戦闘性、階級性に期待する全労働者階級に失望を与えるだけでなく、「総評は  
どこへ行くのだろうか」とのとまどい、ためらいすら生み出しはじめている。

こうした労働運動の情勢を考えれば、資本とたたかう姿勢を確立しようと呼びかけるこ  
とはある意味では当然のことともいえる。だが問題は、宮本委員長が唐突にも一七年前の  
根本的にまちがった四中総決議を「この指摘はまったく正確であったということを多くの  
事件が立証してきたし、今日の事態も立証しております。総評や同盟のセクト的で党派  
なあり方こそ日本の労働運動の階級的な民主的な前進と統一への最大の障害になってい  
る。この点に勇敢にメスを入れて、この障害を克服するための大衆的な討議、そのための活動  
が、革新の日本をつくるためにきわめて重大な課題になっている」(『赤旗』、一一・二二)  
と総括し、この点から「ナショナルセンターのあり方」を考えなければならぬとしている  
ことだ(二月に延明されたといわれる同党第一五回大会決議案にもこの四中総決議はもり  
込まれている)。

四中総決議とは次のようなものである。

「労働戦線の統一という大きな目標からみるならば、社会党支持という特定政党の支持  
を重大なわくとして持っている現状のままでは、たんに相対的に大きな労働組合組織だと

いうことだけで総評をそのまま労働戦線統一の母体として評価することができないことも明らかである」

意見をそのままくめば、「総評は階級的労働運動を正しく代表するナショナルセンターではない」、それは「特定政党支持の誤った規定に立脚しているからだ」。だから、「新しいナショナルセンターの組織化は必然」ということにならざるをえない。したがって、同党の方針に「新しいナショナルセンターをつくるのか、つくらないのか」との疑問が集中せざるをえないことになるであろうし、おそらく同党を支持する組合内部でもこれまでの歴史からさまざまな意見が提示されてくるのではなからうか。

つまり、宮本氏が四中総決議をもちだしたことが、さまざまな憶測を生まざるをえない原因をつくりだしていることだ。同党が「新ナショナルセンターをつくるのか、つくらないのか」は、どうでもいい問題ではない。長期的にみれば、今後の日本労働運動のあり方、政治戦線のあり方にはかりしれない重大な問題をはらんでいる。統一労組懇の代表世話人といわれる引間氏は「『統一労組懇はナショナルセンターに代わるものではない。また、これを拡大してナショナルセンターにするということではない』としながらも、正しいナショナルセンターを確立することの重要性を強調しました。さらに新ナショナルセンターをつくるのか、それとも総評の革新の道を選ぶかという点については『これからの（総評の）動向とわれわれの運動いかにによる』」（『赤旗』、一一・二二）とのべているが、これが卒直なところであろう。

## 資料①

## 統一労組懇世話人組合のよびかけ

統一労組懇（統一戦線促進労働組合懇談会）は十中総を前後して活発な活動をおこなっている。一月二日には「総評単産委員長・書記長・地評代表者会議に提出された幹事会案についての見解」（総評傘下六単産）、同六日には「真に労働者の利益を守るナショナルセンターのあり方についての全国的討論を」よびかけ、同二一～二三日には「大衆討論会」を開催し、「ナショナルセンターのあり方懇談会」を発足させている。今後、一月二日に第一回「あり方懇談会」を開き、同二五～二六日の両日、統一労組懇総会を開催するといわれる。ここで、一月六日のよびかけを資料として掲載しておきたい。

（編集部）

一、十一月四日、総評は、共産党と一線を画して社会党、公明党を中核にした政権づくりを目指すよう社会党にもとめるなど、社公中軸路線をいっそう公然と打ち出した。われ

われ統一労組懇は、総評のわが国労働組合運動に与える影響からして、この総評の動向に無関心ではありえない。

われわれは革新三目標にもとづく革新統一戦線の結成をめざして一貫して奮闘してきたが、総選挙後の政治情勢は、社、共、総評をはじめ革新三目標で一致している勢力が団結して統一戦線を結成することを緊急に求めている。ところが総評の動向は、これとまったく相反するものといわなければならない。

公明党が自民党政治補完の新生党路線を推進していることは、同党が安保条約肯定、自衛隊容認、元号法制化賛成、さらには特定不況産業臨時措置法賛成など大企業擁護、人べらし「合理化」賛成の態度をとっていることからも明らかであり、排除の論理によって反革新分断路線をとっていることは明白である。こうした公明党との「選挙協力」や「政権共闘」を主張することによって総評が労働組合運動の内部から反革新分断路線を推進しようとすることは、きわめて重大な問題といわなければならない。

しかも、われわれが無視できないのは、こうした政治戦線での社公中軸路線の推進と結びついて、総評が労働戦線統一問題についても、反共右翼的再遍への追従傾向をつよめていることである。

日本の戦前戦後の労働運動史は、労働組合運動への反共主義の導入がファシズムへの協力、独占資本への屈服への道であることをしめしている。

われわれは、このにがい階級的教訓を決して忘れてはならない。

二、総評の社公中軸路線にせめられる最近の動向は、「特定政党支持」しめつけによる労組私物化の害悪をしめす典型であるが、このことは、同盟が反共を党是とする民社党支持を決定し、独占資本に追従し職場の自由と民主主義を破壊していることとも相まって、今日の日本におけるナショナルセンターのあり方があらためて問いなおされるべき段階にきたことをしめしている。

われわれ統一労組懇はことし六月、「資本からの独立」「政党からの独立」という階級的初歩的原則を明示した労働戦線統一についての「五項目の提言」を発表したところである。今日、独占資本は、史上最高の利益をあげながら、労働者にたいしては、賃金抑制、「合理化」、社会保障の改悪をはじめ全面的な攻撃を加えてきている。

日米共同作戦態勢の強化、小選挙区制のあらたな策謀にもせめられる平和、民主主義の課題も緊急性を増している。同時に反動支配層に追従する労働戦線の右翼的再編成の策動がはげしくなっている情勢のもとで、われわれは、現実の切実な諸要求実現のための闘争をつよめるとともに、八〇年代を展望し、真に労働者、国民の利益を守るナショナルセンターのあり方をめぐっての、広範で本格的な討論の開始を、すべての労働者と労働組合によびかけるものである。

注 統一労組懇世話人組合は全日自労、運輸一般、民放労連、全農協労連、日本医労協、自交総連、全損保、国公労連、日高教、全動労の十単産で構成。

# 朝鮮その後

## ソウルの街の話

### —— 朴大統領射殺事件と大衆 ——

現代の世界でもっとも凶悪なファナスト、反共軍事独裁者だった朴正熙「韓」国大統領が、その独裁弾圧装置KCIAの金載圭部長に射殺されて一カ月が過ぎた。

最近ソウルの民衆の間では、次のような話が拡がっているという。

朴大統領の殺される数日前、グライステイン駐「韓」米大使は金載圭KCIA部長を呼んで、釜山、馬山の暴動事件を中心に金泳三新民党総裁追放、人権弾圧の問題について、朴大統領はアメリカ政府の認識と考え方をまったく理解していない。アメリカ政府の心配が朴大統領に伝わっていないと強調した。そこで金KCIA部長はこのアメリカ政府の意向をどう朴大統領に伝えたらよいか、軍の同期生の將軍たちに相談した。將軍たちはアメリカ政府が朴大統領を見限り、このままでは大衆の立上りのなかで朴体制が朴と心中させられるおそれがあると考えた。しかし事は慎重を要する。金KCIA部長は同期の仲間を中心に軍首脳に事態の深刻さを伝え、朴排除の方策を協議しようとした。そして軍のごく中樞がKCIA本部に集まろうとした。これが一〇月二六日夜のことである。ところがこの動静を車智澈警護室長、金桂元秘密室長らが怪しみ、警護室員多数を伴って朴大統領自らKCIA本部に乗り込んできた。集まってくる將軍たちを朴大統領自ら恫喝しようとしたのである。情勢は急迫した。金KCIA部長は警護室員の取巻く密室でまず車室長を射ち、続いて朴大統領を射殺した。そのとき部屋の外ではKCIAの要員が警護室員とはげしく射ちあつてこれを殫している。朴大統領を射殺したあと、金KCIA部長は直ちに軍首脳と会い、「私のうしろにはアメリカがついているから心配いらない。すぐ戒厳令を」と要求した。しかし朴を殺しても朴体制は守らなければならない軍は、朴大統領を誤らしためたのは車智澈警護室長であり、朴大統領はその犠牲になったのだという筋書きをつくり、金載圭KCIA部長には因果をふくめて大統領射殺犯人を押しつけたのだ。

これがソウルの街の話であり、金元KCIA部長には身代りの遺体を準備して、裁判が終わったら直ちに外国に逃がす約束ができており、家族らはすでにアメリカに渡ったというお話までついている。

## 労働者のたたかいは階級闘争そのもの

昨年来急激に悪化を続けていた南朝鮮「韓」国の経済情勢は、大企業の相次ぐ倒産、設備過剰と輸出不振に伴う失業と賃金不払、インフレによる物価の高騰とが続き、労働者大衆の生活は極度に悪化している。

「韓」国における「民主回復」「人権擁護」の闘争は、野党の政治家、文筆家、宗教者、学生など知識層がまず先端を切り開いたが、新植民地主義の侵略ともいふべき外国資本の進出と外資を優遇するための労働者への弾圧強化のもとで労働者の反乱が続発し、この労働者の抵抗と反乱が学生やキリスト者の共鳴を呼び起し、民主回復闘争に結合してその大きな底辺を形成するようになった。これがここ数年の反朴・反体制闘争の大きな特徴になっていた。

この点で留意すべきことは、帝国主義とファシズムの収奪と弾圧に反対して立上った労働者のたたかいはまさに階級闘争そのものであり、従来朴一派と同じように反共を基本としながら民主回復を叫んできた知識層や民族ブルジョアジーの一派の「人権闘争」「民主回復闘争」も階級闘争との連携を通じて、「韓」国の今日の階級矛盾に自らかかわらざる

を得なくなったということである。そしてこの大きな反朴闘争の盛り上のなかで、「反共」と統一とは平行線であり、両立し得ないものだ」という認識が大眾のなかに育ってきている。この情勢に対応して、朴一派は労働者・農民の闘争と学生・知識人の闘争とが結合しないうようにするため、ことし三月にクリスチャン・アカデミー事件なるものをデッチ上げていいる。大眾のなかに入っていく聖職者を「アカ」だ、北のスパイだとして縛った事件である。しかし追いつめられた大眾は屈してはなかった。

新民党の金泳三総裁にたいする総裁の資格剥奪、国会議員からの除名という暴挙は、大眾の怒りに火をつけた。金泳三の選挙区釜山は野党の強い地域だが、学生の街頭デモをそれに数倍する群衆が包んだ。与党民主共和党の幹部が外人記者に語った通り、群衆の大部分は「仕事のない人たち」だった。群衆は警察を襲い、放送局や新聞社を襲った。与党の建物も襲った。一〇月一六日夜のことだ。群衆と警官隊と双方から数百人の死傷者が出た。

この群衆デモは、一〇月一八日には馬山に飛火した。日本の資本が低賃金労働を搾取している自由貿易地域のある街である。

釜山では戒厳令が、馬山とすぐ近くの重工業団地昌原では衛戍令が発動され、軍隊が出勤して鎮圧に当たった。群衆に向けた銃口の前に学生十余人がたちはだかり、恐怖に狂った兵隊の自動小銃弾に倒れ、釜山の街路を血で染める場面もあったという。

### ポスト朴をめぐる動向

朴大統領は射殺された。しかし、朴を殺した下手人は朴の腹心の部下であった。大眾ではなかった。下層兵士でもなかった。下手人は群衆蜂起をまねいた責任を朴にとらせた、体制内の男であった。

このことは、今日のポスト・朴をめぐる「韓」国の政界を分析する上で重要である。政権を握っているものが殫されたときは、その政権を握っているものを殫したものが政権を握るのが通常の常識である。しかし金載圭は公式には大統領射殺犯として手錠をかけられている。その彼を裁こうとしているのは誰であろうか。崔圭夏大統領代行であろうか。そうではない、戒厳司令官である。軍である。「韓」国軍の統帥権を握っているのは在「韓」米軍司令官であり、その背後にはアメリカ政府がついている。

現在の情況のなかで、「韓」国の政権は誰の手にあるのだろうか。形の上では崔大統領代行の手のなかにあるのだろうか、実質的には別のところにある。アメリカ政府を背にした軍の手にある。しかしアメリカは軍政は好まない。朴なきあと、政権が民主的に選ばれた男の手に渡ることを望んでいる。

では死んだ朴から誰に政権を渡したらよいか。その誰をどうやって選ぶのか。当初軍のなかでは朴大統領に後継者を指名させ、平和裡に政権を移譲するシナリオを考えていたという情報もある。しかし朴大統領がそんなことに同意する可能性はゼロだった。シナリオが出来ないうちにピストルの弾丸の方が飛び出してしまった。この推理はソウルの街に流れている話と符合する。

釜山の群衆デモを点火した新民党金泳三総裁は、群衆のエネルギーを組織したわけではないが、それを背景に政権への参加を求め、民主回復を求めている。しかし「朴なき朴体制」は体制批判派に政権を渡す気配はない。せつかく朴がいなくなったのだから、この事実をテコに「新しい朴体制」をつくりたいに違いない。つまり反共軍事体制は崩せない。それは当然のことながら独裁色を伴わざるを得ない体制だが、独裁色をうすめたいと考えている。独裁色を消すためには、野党の要求をある程度いれなければならぬ。ところが反朴体制の闘争の担い手だったものを政権のなかにとり込めば、獅子身中の虫ともなりかねない。とくに「南北統一」を指向することは、新しい「朴なき体制」の自己否定になる。



現在の反共軍事体制を維持しながら「ゆるやかな民主化」を進めようという、崔大統領代行の蔭の権力の構想には無理がある。日本の自民党のなかの政権のタライ廻しのように、朴体制与党の民主共和党が引き続き政権を担当できないものか。これが「韓」国のいまの権力筋の考え方であろう。そのための受け皿として、金鐘泌元首相、元KCIA部長が総裁におどり出てきた。毎日新聞の重村記者は「八〇年代に復活はかる大物」と、金鐘泌総裁出現を取上げている。

この重村記者は日本の外務省筋と密着しているから、日本の政府・自民党の筋も金鐘泌出現を期待しているかも知れない。園田前外相が辞任する直前外務省首脳に、「これまで日韓関係の事件はアメリカから明るみに出されてきたが、これからはソウルから出てくる可能性があるから注意して欲しい」と訓辞している。利権から締め出されていた反対派に下手に譲歩すると、日「韓」癒着がかくし切れなくなるということも、「韓」国の権力は知っているはずだ。日本の自民党筋もそれは困るから、朴体制をつくりあげる上で中心人物だった金鐘泌の登場は歓迎したいところであろう。

### 注目すべき経済情勢

「なァに。民衆はよく知っていますよ。いま上層部が何を考えているか、何をしているか、知ってますよ。学生がまず学園民主化要求をかかげて立ちあがったでしょ。労働者もまた立ちあがりますよ」。

ソウルの民衆の間に拡がっている話をしてくれた友人は私にそういつた。

一月二四日夜ソウルで、戒厳令下とはいえ反体制派の指導的な人々が集会を開き、デモをおこなった。約千人が参加したと新聞は伝えている。そこで出された声明は、改憲―選挙―民主政府樹立という政治日程を要求し、現在民主共和党と軍が進めている「もう一人の維新大統領、そのあと改憲」という政治日程を「独裁の力量を再整備、強化する時間かせぎ」と攻撃し、維新体制維持をはかろうとしている金鐘泌、李厚洛、李承哲ら一二名の処断を要求した。

しかし、この声明は金芝河氏らを含むすべての政治犯、良心犯の釈放を要求していない。金大中氏が朴大統領射殺事件のあと、「彼は私を恐れていた。しかし自分は彼を何ら憎んでいない。彼と私は反共という点では同じだが、そのやり方が違った」と述べた言葉も気になるが、良心犯、政治犯の釈放が要求されていないことはもっと気になる。

さらに気になるのは、議員総辞職を打ち出していた野党新民党が辞任を撤回したことである。知識層から労働者・農民に至るまでの反朴闘争、反体制闘争の統一と連帯が切崩されているという思いがする。統一に要求の重心を置くものと反共・民主回復に重心を置くものとの間に、さまざまなかサビが打ち込まれていると思う。

しかし、南朝鮮の経済の破綻は決定的である。日・米両国の政界・財界は「韓」国経済を軍需産業化することによってその破綻をつくらせようとしている。その説明はここでは省略するが、「韓」国経済の矛盾は破局に向うのみであろう。

ソウルの話を伝えてくれた友人によれば、反体制派の人々の間で、「統一して民族が一つになれば、共産主義だって何だっていい」という人がふえているという。弾圧体制は次から次へと群衆決起をうながすだろうし、反体制運動の統一、そして南北の統一をもたさずにはおかないだろう。

日「韓」癒着は、いうまでもなく日本帝国主義の「韓」国への新植民地主義侵略の特徴的局面である。この局面のなかでたまたかう「韓」国労働者の反体制闘争を、日本の労働者階級は力を合せて支持し、連帯行動を起こしていいはずである。日本で朝鮮の統一を支持する統一闘争を起こすことができれば、「韓」国のたたかう人々の統一を促進することにもなると思うのだが、どうであろうか。

(Y)

## 配転攻撃を考える

——日東タイヤの仲間の一総括——

日東タイヤで働き続けるということ

私たち八名は、全員が東北または九州の地方出身者です。すでに日東タイヤ資本の下で十年以上働いてきた者もいます。地方から出てきた私たちにとって、まず、ここ湘南工場で働き続けてきたこと自体が、実際には一つの闘いであったと言えます。ほとんどの者が「いつかは故郷に帰ろう」と思っただけで湘南工場に就職したし、職場の重労働や「友だちがでない」という中で、「故郷に帰る」という気持ちになりがちでした。実際、一緒に就職した者のほとんどがすでに退職させられています。

それでも私たちは、日東タイヤに残ってきました。それは、職場の矛盾に少しだが気がつき、学習で少しはまなんできて、「今の職場を少しでも良くしていこう」という考え方ができていったからです。闘って変革をしていくことを知ったから、重労働に對しても、そこから逃げて故郷に帰るということにならなかったのです。

それにもう一つは、社青同や『まなぶ』友の会での、話せる仲間ができていったことです。この仲間がいなければ、「闘う」ことは知っていても、日東タイヤを辞めていたことでしょう。

ですから、私たちだけが今回首を切られたのではなくて、実際には、すでに大多数の労働者がこれまで首を切られて辞めさせられていたのです。それは、「田舎に帰りたい」「三交替勤務はいやだ」といった「個人的な理由」にされてきたにせよ、資本による実質的な首切りでしかなかったのです。

「働き続ける」ためには「闘い続ける」という意識と団結をつくり拡げていかなければならなかったのです。

逆に、闘うことを知らないで働き続けようとしている仲間は、資本から首を切られないために自分の身体をボロボロにして働かされています。また、子供と離れて泣き泣き桑名工場に配転させられています。

でも、どんなに身体をボロボロにしても、資本主義的合理化は避けて通ってくれません。「希望退職で辞めたSさんと話したが、誰れが考えても彼には桑名に行ける条件はなかった。病弱の母をかかえた彼は、桑名へ行ってくれと言われた時、会社を辞めざるをえなかった」ということなのです。

私たちは、闘うことを知っていたし仲間もいたから、ずっと日東タイヤ資本の下で働き続けてこれたのです。

配転をどう考えるのか

首を切られていろいろな職場で働いている仲間と話す中で、配転についてもいろいろな受けとめ方があることを知りました。教組や自治労では、「人事異動」という受け取め方が一般的で、しかも、「異動」するのはあたりまえとなっています。相当の活動家でも簡単に配転をしています。配転が「出世の道順」になっていたり、「よりましな職場に移る」ということになっています。いわば、個人的な問題のままになっているのです。

教組や自治労でも、当局は、「同じ職場に同じ者が長くいると職場がよどむ」「適材適所に移って能力を發揮してもらおう」と言っています。当局の側から言えば、「人事異動」

は労務政策であり、合理化の一環なのです。このことはつきりしていかないと、自治体合理化、教育合理化に対して闘えないのではないのでしょうか。また、活動家自身が「今の職場を少しでも働きやすいものに変えていくんだ」というかまえが生まれてこないのではないのでしょうか。

日東タイヤで言うと、配転についての受け取め方は一般的にも相当に違います。「多くの仲間は、なにか自分に落度があつてとか、会社に良く思われていないから配転されるんだ」という認識だ。職場のKさんなんか、一日のノルマ本数は一八〇本なのに二四〇本つくるし、助勤や残業はやるという人だが、彼に桑名配転がきた時、一所けん命やつてきたのになぜ俺に配転がくるのか、と職制にくってかかった」ということなのです。「働く能力がない、だから配転されるのだ」という受け取め方なのです。ここでも、まだ個人の問題にされています。資本主義的合理化という理解を、まだ払うことができないままだったのです。

どのような職場でも配転が資本主義的合理化である以上、私たちがそれに反対していくかまえを持つのが原則です。自分に対する配転であれ、仲間に対する配転であれ、同じです。ここがはつきりしないと、配転は首切りだ、とは言えないし、やっぱり闘うしかないともなりません。

### 指名配転攻撃に対して

私たちに對し指名配転攻撃が加えられた時、まず、配転を拒否するということが討論の前提となりました。

「はじめは、配転もさることながら、何回も工場内をたらい回しにされ、あげくのはてに桑名に行つてくれという会社のやり方にもすごく頭にきた。ずい分と感情的なものが強かった。」

「それに、社青同に集中的に攻撃がかけられたことに対する反発もあった。表面的にとらえていた」。

しかしこのことは、拒否して闘うということではなくて、こんなにまで攻撃してくる日東タイヤ資本から逃げて故郷に帰るということを多く含んでいました。

「自分は長男でいつかは田舎に帰ろうという気持ちがあった。希望退職、配転が出されて一時的にせよこの気持ちが強くなった。」

「自分も、今の職場は四直三交替で仕事もきつい。別にあてがあるわけではないが、田舎に帰って百姓なり新しい職場を見つけて働こう。いい機会だからこの際辞めてスッキリしたいと思つていたのが本当の気持ちだ。」

配転拒否と故郷に帰るといことが一体となつていたのです。ここに大きな弱さがあったのは明らかです。

それでも、配転を拒否し解雇されて闘おうとなつていきました。それは、桑名工場への配転がどう考えても不当だということがつかめていったからです。

「会社は、桑名工場は新鋭工場で将来性もあつたと言つたが、その職場で約十人に一人の割合で仲間が辞めている。桑名工場に配転された人たちと話してきたが、共通して言つていたのは、泣き泣き行かされたこと、このまま働き続けることができるんだろうかという不安が強いことだ。それだけ合理化が進んでいる。」

「この湘南工場でも約五人に一人が辞めさせられ、ほとんどの職場の人員は再建計画よ

り人員が少ないという実態だ。それにもかかわらずなんで俺たちを配転させるのかと聞いても、寒川より桑名の方がもっと人員不足だ。桑名は将来性もあるし、君は若くて優秀だとしか言わない。」

俺たちの闘いは、四直三交替導入反対以来、働く者が安心して働き続けられる条件を確保しようということで運動をやってきて、昨年の組合役員選では資本の介入にもかかわらず三分の一近い支持を得るまでになった。合理化の進行に伴って仲間の不満が蓄積されてきている。資本はこれを恐れている。」

解雇されても闘おうとなったもう一つの大きな理由は、一緒に闘ってきた自分たちがバラバラになりたくないということでした。なかなかホンネを出して話してはいけないお互いではあっても、それでも大切な仲間だし、裏切ることでできない仲間だったのです。

自分の勝手都合で労働者を使う資本に対する怒りの中で、桑名工場の実態を調べ、退職させられた仲間の実態を知り、漠然とながらも配転は首切りだということをつかめていったのです。

「資本は人減らしを、働き続ける条件を奪っていく中で進めていることが明らかになった。その一つの方法が配転だ。」

「俺たちへの集中攻撃も、社青同だから攻撃されたということではなくて、労働者としてあたりまえの権利を主張し行使する。たとえば、職場が暗いから改善しろとか、年休をとらせるとか、こういう運動が資本にとって合理化を推進していく上で障害になる。希望退職の時に会社は十項目の募集基準を出したが、要するに資本に盲目的に服従する者しかいないというのだ。」

資本の生産性向上運動を阻害する者はいらないということであり、「あたりまえの権利」を主張し行動する者は生産阻害者であり、資本はこのような者の首を切って利潤の拡大をめざすのです。

### 足を運ぶことが不十分だった

年休を行使し、残業を拒否し、合理化に反対をする。こういう「あたりまえの権利」を私たちは主張し行動してきました。一方、職場の大多数の人は、冠婚葬祭でしか休めない、毎日の残業はあたりまえ、タイヤ生産本数を競い合う、という状態です。職場の人たちがそんな状態に置かれているのに、自分たちだけが権利を主張し行使するのは、まちがいったのでしょいか。私たちがやりすぎたので、職場の人から資本によって孤立させられ、集中的に攻撃されたのでしょいか。

私たちの反省の最も大きな点は、けっして「やりすぎ」たのではなくて、やり足りなかったということにあります。権利を主張し行使してはいても、仲間のところに足を運び話し込み、実態をつかみ、それを拡げていくという活動があまりにも不足していたのです。私たちが指名配転を言われ首を切られた中で、職場の人から「おまえたちは自分の時になったら騒いでいるが、これまでも桑名に配転された者がいたし、その時は何もやっていなかったじゃないか」と、ずばりと批判されました。実際、その程度の活動でしかなかったのです。桑名工場の実態も、自分たちに指名配転攻撃がきた時に、はじめて本気になり調べに行っただけです。

「首を切られ、もとの職場の人のところに電話で夕方頃に行く約束をした。その人は、職場ではバリバリと仕事をし、ちゃんと仕事をしない奴はバカだと言っていた。自分は、その人と一度も話したことがなかった。話してもムダだと思っていた。行ってみると、自

分のために夕飯を用意してくれていた。本当にうれしかった。その人は、外側から自分  
 していることをちゃんと見ていた。毎日の門前ピラ入れに対しても、最初はピラを受け取  
 る気はなかったが、雨の日も風の日もピラを入れる自分たちを見て、ピラを受け取る気  
 になったことだ。奥さんは、希望退職の時、ご主人が辞めてしまうんじゃないかと心  
 配して三日三晩も眠れなかったということだった。」

私たちの弱さは、あたりまえの権利を主張し行使するにしても、職場の人のところに足  
 を運び話し込むことが全く不足していた点にあったのです。実態をつかむことができ  
 なかったのです。

### 討論を生き生きしたものに

私たちの配転拒否について、「それでもやっぱり桑名工場への配転に応じても良かった  
 のではないか。首を切られてしまっただけでも闘うといっても限界がある」という意見も出され  
 ています。私たちも、このような意見を大切にしながら、さらに討論をしていきたいと思  
 っています。

でも、次のような点は討論のためにも確認が必要だと思います。

第一に、私たちへの指名配転は、資本の意図としては指名解雇そのものだったというこ  
 とです。資本は桑名工場で働かせるために私たちを指名配転したのではなく、「生産阻  
 害者」である私たちを辞めさせるために指名配転したのです。ですから、単に、活動家を  
 新しい職場に移して、それまでであった組合員との結びつきを絶つというものではなかつた  
 のです。

第二に、桑名工場への配転について、私たちに対してだけでなく、どの労働者について  
 も「配転はいやだ」という当人の意志や実態が無視されている現状があります。私たちは、  
 資本の都合で勝手に動かされるのに怒りを覚えたし、これを認めている労働運動の現状の  
 弱さを思い知らされました。これを変えていく闘いを組み上げなければ、もっと多くの労  
 働者が首を切られてしまいます。だから私たちは戦術として配転拒否をしたのではなくて、  
 桑名工場への配転は許せないという立場で配転を拒否したのです。

配転を拒否して解雇された現状の中で、実際に私たちの課題となっているのは、「配転  
 を拒否したのは戦術として正しかったのか」といった議論ではありません。資本の勝手に  
 よる配転攻撃を闘いとして拒否するということは当然のかまえてあり、日東タイヤ資本の  
 下で言えば拒否し抜くことが必要な闘いだったのですから。課題となっているのは、「資  
 本の勝手な配転を許さない」という運動を解雇撤回闘争として職場の中につくり上げてい  
 くことです。日東タイヤ労組を強化していくという闘いです。私たち自身、首を切られ生  
 活できない現実の壁の中で、ともすればこの闘いの課題を見失いがちです。ここに私たち  
 が闘ってきた焦点があります。

(注)これは「日東タイヤ解雇撤回闘争」発行のパンフ「ていこう——日東タイヤ解  
 雇撤回闘争」から転載させていただいたものである。自分たちのたたかたいへの真  
 撃な反省が編集子の心を打ったからである。パンフ購読希望者、そしてはげましのた  
 よりを左記に寄せていただきたいと思う。

住所・神奈川県寒川町一の宮一〇九

気仙真琴方日東タイヤ解雇撤回

争議団 TEL 〇四六七―七四一〇三〇六

# 統一はたたかいとるもの

—— 沖電気一周年集會に千六百名 ——

「同じ攻撃にたいして一緒にたたかう。その礎（いしずえ）となり、（七一名の仲間全体が）信頼し合ってたたかいたい」

これは、去る一月二日おこなわれた「沖電気指名解雇撤回闘争一周年集會」での仲間のあいさつだ。この仲間はこれだけを笑顔で語った。千六百名の集會参加者がかもとも深く感銘した発言の一つであった。この短かい言葉のなかに、階級闘争の真理があるからだ。

今日、「統一」という言葉が大安売りされている。だが、沖の仲間たちは「統一」とは一体何か、どのように勝ちとれるのかを、粘り強い努力で示してくれた。

統一は実際、労働者に必要だ。そして、労働者のほかに、だれも彼らの統一を助けることはできない。このことを理解することが何よりも必要である。統一を「約束」することはできない。それは空虚なえらがりであり、自己欺瞞にすぎない。

統一はたたかいとらなければならない。そして当の労働者、自覚した当の労働者だけがそれを執拗な、不屈の努力によって勝ちとることができる。統一をおしすすめることができるのは、すすんだ労働者の、すべての自覚した労働者の努力と組織だけである。

沖の仲間は、この真理をみずから体現してみせてくれた。この努力を大いに宣伝し、横に拡め、全労働者階級のものにすることが必要である。そして、集會は、この努力がすでに力強く開始されていることも示した。同じ指名解雇や不当解雇に反対してたたかっている全造船機械・佐伯分会（大分）、全金・金石舎、日産・厚木自動車部品の労働者等も参加。「『一人の指名解雇も許さない』の声を全国津々浦々に広げるため、すべての働く仲間、労働組合に闘争勝利への支援を訴える」との集會決議が採択されたからである。

こんにち、総評運動の右傾化がある。だが沖の仲間には象徴される職場レベルからの連帯の輪も拡まっている。ここに統一闘争への核があり、総評労働運動の階級的強化の方策がある。そうしたたたかいの拡まりは、現在の右翼的な労働再編の動きを封じとめずにはおかないであろう。

## 資料② 沖電気一周年集會 集會決議

三井・三池以来「死語」といわれて久しかった、大企業における「指名解雇」が、約三〇〇名にも及ぶ大量「指名解雇」として昨年十一月、沖電気で行なわれた。これは「経営危機」を口実に猛烈な雇たたきによる退職強要によって、約一、〇〇〇名を越える労働者を退職に追込み、まだ足りない引き続き強行されたものである。「倒産必至」の危機に

瀕していたはずの沖電気は解雇わずか四カ月後の七八年度決算において経常利益十億円の黒字とし「人が余っている」を理由に一、三五〇名もの首を切っておきながら、その舌の根も乾かぬうちにユーレイ会社を使つての人集め、大量の学生アルバイトの使用、さらに大卒一〇〇名以上、高卒一四五名にも及ぶ新規採用、主力工場である品川工場の閉鎖を計画する一方、約一〇〇億円を投じて九州工場の建設計画、恒常化する長時間残業などどれを取ってみても決して「経営危機」などなかったことを沖電気自ら証明している。又これらの事実は、利潤追求のためなら労働者を使い捨てて省りみない資本の冷酷さをも証明したものである。

沖電気の指名解雇は全ての労働者、労働組合への重大な挑戦である。資本にとって都合の悪いものを意のままに放り出すことのできる「指名解雇」は、資本のもっとも鋭い攻撃であり、一方の狙いは、それをテコとして労働者の既得権を根こそぎ奪いさり、物言えぬ職場作りや、闘えない労働組合作りを通して職場の専制支配確立を意図したものである。同時に「指名解雇」は労働組合の存在を否定するものであり、幾多の労働者の血と汗によって作りあげた労働者の働く権利、生る権利に真正面から挑戦するものである。だからこそ「指名解雇」の暴挙は、労働者の憤激をかわすにはおかない。

全ての闘う被解雇者七一名は、沖電気争議団に団結し、全国の働く仲間の物心両面にわたる暖かい支援に支えられ、必ず指名解雇撤回、職場復帰までたたかう決意を固めている。昨年十一月以降、社会的批判の高まる中、「沖電気を参考にした」とする住友重機をはじめ造船等で「指名解雇」が波及している。「一人の指名解雇も許さない」の声を労働者の英知を結集した闘いとして、全国津々浦々まで広げるため、一周年集会の名において全ての仲間、労働組合へ解雇撤回闘争勝利への支援を訴えるものである。

「沖電気は不当な指名解雇を撤回せよ」右決議する。

一九七九年十一月二十一日

沖電気解雇撤回一周年集会

## ◇読者からのたより◇

私は、……区職員住宅に住む独身青年。反合理化闘争の重要性を必死に訴え続けています。しかし、そういう私たちにとって最近の社会党・総評の有様には文字通り歯ざしりするばかりでした。そんなお貴通信が号外で発刊した「『道』批判者たちへの反批判」は、驚くほどすっきりしていて、久しぶりに留飲を下ろす思いで読ませていただき、また私たちの日頃の運動に大きな自信を得ることができました。一月一日号にある鈴木氏の論文にあったように、「労働運動、その焦点である首切り反対闘争に確固不動の闘争態度を確立すること、それが社会党勝利のための不可欠の条件である」。まさにその通りだと思います。

社会通信の皆さんのご健闘を期待します。

(東京・〇)

## ◇資料と解説◇

## 全電通福島県支部問題について

全電通福島県支部問題の本質は、本誌第七五号でみたように「組織内部の争い」ではなく、労働運動のあり方をめぐる問題である。そこで明らかにされているのは、(1)全電通が進めてきた「春闘見直」の問題。(2)第六次合理化の地方的見体化をめぐる問題。(3)組合民主主義の問題である。

全電通福島県支部では一月二四日から、「再確認運動」がおこなわれている。一月二六日おこなわれた全分会役員会議では分会役員一五名中一一一名が再確認に応じ、四名（新左翼系）が「拒否」したという。ここでは、分会役員に認められた「誓約書」（再確認）を資料として掲載しておきたい。

資料をごらんになればすぐわかるように、この誓約書は、第三一回県支部大会で否決された議案と同様のものである。

資料③ 全電通福島県支部問題について  
分会役員への「誓約書」

私は、分会役員として、従来から指摘・指導を受けてきた諸事項について、次の態度で活動していくことを誓います。

記

- 一、「組合員再確認」の全内容について、積極的にこれを確認しその立場で指導を強化します。
- 二、第二八回、および第二九回全国大会に対して行った、いわゆる組織破壊行動の如き行為は絶対に許されるべきものではなく、従って今後は一切そのような指導は行いません。
- 三、職業病闘争にあたり、「治療と闘いは一体」ということで治療専念を軽視の上、諸行動の先頭にり病者を立たせるなどということは、全く誤まった取組みであり、り病者は治療専念が第一義であるとの方針で指導に当らなければなりません。
- 従って、四月一八日、同二五日、同二六日および七月一〇日、同一六日などにおける郡山分会の、り病者による集団交渉的行動は誤まりであり、このようなことを放置することは絶対にしません。

また、り病者連絡会の復活につながるような動きに対しては組織方針に基づき対処します。四、同じく郡山分会において、頸肩腕症候群り病者が、医師の指示に従わずレントゲン撮影を拒否し、加えてこのことの分会情報が事実を歪曲して周知を行ない、医師に陳謝文を提出するという事態がありました。

このことは、治療態度、組合の名譽の点から重大問題であり、このような取組みは絶対行いません。五、「頸肩腕症候群は合理化病である。従って、何処の職場にいつても治らない」との誤まった方針のもとに、り病者の職種転換を否定するが如き取組みは、治ゆの促進を阻害する誤まった指導であり、従って、今後は職種転換を促進するよう積極的に対処します。中央協約、地方確認に基づく治ゆに関する組織指導を正しく実践します。とくに職種転換絶対反対という指導は行いません。

六、情宣活動は、全電通の組織方針を正しく組合員に伝達することによって、一層の団結強化を図ることがその使命であるので、これに反し、いやしくも、事実無根の反組織キ



ヤンペーンなどを許容することなく、自らも、そのような誤りをおかさないこととします。七、六次中央了解事項の具体化について、「雇用確保と働きがいのある職場づくり」という組織決定方針を全面的に否定し、「利案・調査業務の実施絶対反対」の誤った方針の延長線上に「業務量のいかんにかかわらず、一名の要員減でも絶対反対」などの行動があります。

今後はこれを改めさせるため組織方針を正しく認識の上、取組みを強めていきます。八、青年・婦人活動における「独自性・創造性」は、基本組織と無関係というこちではなく一体的のものであり、指導・被指導関係もまた明確であります。

しかるに、一部分会において、青年・婦人会議の反組織キャンペーンを許容したのは誤まりであり、従って、以上の立場で日常活動・情宣活動など、全電通の方針に反する活動に対しては、きびしく指導対処します。

九、大衆行動の展開は、その都度、支部・地本の指導のもとに、組織が責任をもって実施するものであり、従って、組織方針に徹した取組みを行っていきます。

十、労使間の団体交渉で扱うべき事案を、盟約事項と称して一方的に実行することは、全電通の「職場活動のあり方」に反する取組みであり、このような取組みおよび指導は直ちに改めます。

十一、社会主義協会（向坂派）、社青同について

1、社会主義協会（向坂派）社青同は全電通の敵対組織であります。

2、全国大会破壊行為以来、全電通に対する組織攻撃を継続して行なっており、社青同については、機関紙「青年の声」等を通じた組織攻撃が今日なお顕在しております。

3、全電通福島県支部における過去数年間の組織混乱の原因もこの組織攻撃にあります。4、したがって、社会主義協会（向坂派）社青同による組織攻撃に対し毅然として対決し、このための情宣活動オルグ活動の先頭に立ちます。

5、また、組織として、社会主義協会（向坂派）社青同の「出版物」、「諸会議、集会などの行事」、「『まなぶ』雑誌」、「『社会主義』などの講読」、「学習会、講師依頼」など一切の関係を絶ちます。

十二、地域共闘について

1、社会主義協会（向坂派）、社青同など敵対組織との共闘は行なわないこととします。疑義のある場合は上部機関の指導をもとめます。

郡山分会の「故鈴木千恵子さん追悼集会」に関するとりくみなど、地域共闘をかくれみのにするやり方は誤まりであり、このようなことは一切ないよう対処します。

2、春闘みなおし問題など全電通の方針の理解をもとめるため全力をあげます。

一九七九年一月二二日

所属分会 役職  
氏名

㊦

全電通中央本部  
執行委員長 及川 一夫 殿

① & ② トライアル・アンド・エラー (4)  
 富さんと有珠山……………  
 ③ & ④

四年ほど前の総評大会のときである。富塚事務局長が誰かに言われたと感じ入り、「総評は富士山のごとくであろう」と強調した。これだけ聞くと「？」「どういう意味で言っているのか？」と首をひねったが、そこは心得たもので、「総評は富士山のようにどこからでも仰ぎ見られるようになる」という注釈もついたのである。聞いていた私は、それでも肚に落ちなく、共産党の選挙ポスターの富士山を思い出したり、さらに「君が代」と「日の丸」などにオーバー・ラップしたりしてすうっと入らない。

そしたら、案の定、発言を続けていた北海道の一代議員（たしか地区労活動家と言っていたが、まず「北海道から富士山は見えない：」と言って会場の笑いを誘い、さらに続けて「山は、有珠山のように活火山でなければならぬ」と

とやってのけたものだから、満場大爆笑と拍手であった。富（とみ）さん、それから「富士山：」をピタッ言わなくなった。この警句にはいろんな意味がこめられているようだ。富士山はカッコいいが、労働運動——そして変革の運動は、カッコ良さで成功した歴史は一つもない。有珠山はカッコ悪いが胎動している。

「胎動」とはいい言葉だ。胎児が母親の胎内でケトばしている様（さま）を思い出す。そう、世界も胎動し、すでに資本家のいない国が二六カ国も誕生している。

やはり「胎動」しなければならぬ。最近の富さんの動きは、あれは胎動とは言えない。胎動とは、それぞれの組合がまず賃金・労働条件・クビ切り・いのち破壊・思想攻撃・組織攻撃：などにたいして職場を核に主要にたたかい関連産業、地区労、民主団体、党との共闘を粘り強く追求し、そしてたたかいたたかいの「領域を拡大」し、統一戦線まで展望すべきであろう。しかし、今、総評は胎動のミナモトとなるこれら職場闘争等を指令していない。これらのたたかひの蓄積なくして胎動はあり得ないし、富さん好きな「ゆさぶり」も起きない。いまは逆に、総評はゆさぶられているし、ユスられているのが実態であろう。

すでに天池・宇佐美・塩路・宮田・中村：など、労戦右翼再編の領袖たちが、年内に新組織の準備会を打ち出し、来年大会シーズンをピークに旗上げ（呼称は、新同盟？ 総同盟？ 友愛会？ 産労クラブ？…）を目論んでいるようである。とにかく早く出発させといて、あとは総評等から一本ツリの戦略・戦術のようだ。鉄鋼はすでに「異夢」をみており、あと合化がアブナイといわれている。

富さん、「共同」によると、「新組織を展望する中で、ICFTU加盟検討：」となっているが、彼らは競って右へと遠くなり、国労・私鉄・自治労：などはこっちで引き締まっていたら、富さん、あなた独りぼっちになりかねないよ。あなたに貴の花の後半戦を見せたかったよ。